姶良市モラリティ・インプルーブメント推進事業啓発資料

令和6年度

『心を紡ぐ』

第11回「ことばのいずみスピーチコンテスト」

第2回「ハートフルメッセージコンテスト」　より

姶良市教育委員会　編集

☆　姶良市「モラリティ・インプルーブメント推進事業」について

モラリティ・インプルーブメント推進事業は、学校・家庭・地域が協力して、思いやりや感謝の心などの子どもたちの道徳性を高めていく働きかけを意図的・計画的に行っていこうとする事業です。道徳性が高まっていくことで、「自分を伸ばし、他人を思いやり、よりよい社会をつくっていこうとする心をもち、そして行動できる人」に成長していけるようにしようという取組です。

（モラリティ＝道徳性、インプルーブメント＝向上）

※ 子どもたちの道徳性を高めていく中で、確かな自立へ導き、社会（公共）に貢献できる人づくりを社会全体で協働して取り組んでいこうとする事業で、姶良市子育て基本条例を具体化するものです。

取組の重点

◎ 学校における道徳教育をもっと充実・推進しよう。
◎ 学校・家庭・地域が協働して子どもたちの道徳性を育成しよう。

学校での取組を充実・推進させるために・・・

指導力を高める研修会の実施
- ◎ 学級経営研修会
- ◎ 道徳教育推進教師研修会

道徳授業を充実させる指導方法や教材の開発
- ◎ 道徳科指導法開発委員会

協働

学校・家庭・地域が協働して子どもたちの道徳性を高めるために・・・

学校・家庭・地域が協働して、子どもの道徳性を育むための取組を考える協議会の設置
- ◎ モラリティ・インプルーブメント・ミーティング
- ◎ 教育フォーラム「ハートフルあいらんど」
- ◎ 「みんなのカレンダー」「心を紡ぐ」での啓発

研究実践校による家庭・地域と協働した取組の推進（小学校：毎年1校、中学校：隔年で1校）
- ◎ 道徳性を高めるための、学校・家庭・地域と協働した取組の公開
- ◎ 家庭・地域への「道徳授業」の公開
- ◎ 学校・家庭・地域による子どもの道徳性についての協議

本誌では、「ことばのいずみスピーチコンテスト」や「ハートフルメッセージコンテスト」の優秀作品を紹介しています。

「ことばのいずみスピーチコンテスト」は、「あいさつ」「規則の尊重」「感謝の心」「郷土愛」「夢・志」をテーマとして、小学校5・6年生、中学校1・2年生、高等学校1・2年生を対象に作文を募集しました。第1次審査で優秀作品に選ばれた 11 名が 10 月に行われた「ハートフルあいらんど」の中で、最終スピーチを行ってくれました。どの児童生徒も自分の思いを精一杯伝える素晴らしい発表をしてくれました。その中で、最優秀賞に選ばれた3作品を掲載しています。

また、「ハートフルメッセージコンテスト」は、姶良市内に在住の18歳以上の方を対象に感謝の気持ちを表現した手紙を募集しました。どの作品も、大切な方への感謝の気持ちがあふれる素晴らしい作品ばかりでした。その中の3作品を掲載しています。

作者の思いがみなさんの心にも届いたら嬉しいです。

～「ことばのいずみ」コンクールスピーチコンテスト【小学生の部】最優秀賞作品　～

「祖父のお米」

　毎日夕飯のお米を炊くのは、ぼくの仕事だ。
　「そろそろお米がなくなりそうだよ。」
　「じゃあ、ばあばに電話しなきゃね。」
そう言う母は、生まれてから一度もスーパーでお米を買ったことがない。なぜなら、わが家で食べているお米は、福岡に住む祖父が作っていたからだ。
　「もうすぐお米がなくなるから送って。」
　電話でそう言うと、祖母は、
　「じいじのお米ももうすぐなくなるばい。」
少しさみしそうにそう答えた。
　ぼくの祖父は八十歳になるまでお米や野菜を作っていた。しかし、昨年、田植えの前に入院することになり、稲刈りが終わったあと亡くなってしまった。
　ぼくは、社会科で、米作りを学習し、米作りのかていや大変さを学び、少し興味がわいたところだった。それまでは、福岡の大きな米用冷蔵庫に一年間分のお米が保管されているのしか見たことがなく、お米がどう作られて、ぼくたちの口に入るのか考えた事もなかった。祖父の水田がどこにあるのかさえも何も知らなかった。
　ただ、庭にあるトラクターに乗って遊んでいたくらいだった。そのトラクターが、田おこしや代かきに使っていたものだということも学習してから分かった。
　「田植え機やコンバインはどこにある。」
と母にたずねると、
　「お母さんの小さい頃は家にあったけど、今は近所の人達と共同で使っているんだよ。でも、もっと昔につかっていたとうみやだっこく機は、納屋に今もあるかもしれないね。」
「見てみたい。」
　日本では、お米が、昔から食べられてきた。しかし、今、食の多様化により、パンやめん類などのメニューがふえ、お米が食べられなくなっている。正直、ぼくもパンが好きだ。そんな背景から、米の生産量が消費量を上回っていることを教科書で学んだ。
　お米を作ることは、簡単ではないことは分かっている。でも、祖父が続けてきた米作りを終わらせるのは、くやしい。大人になったらお米をつくる作業をやってみたい。
　今年は祖父の初盆だった。福岡に帰って、とうみを見ることができた。大きなガラガラのくじ引き機みたいだった。あれではこうりつが悪いだろうが、使ってみたい気もした。
　ぼくは祖父の祭だんに向かって、
　「いつかじいじの仕事を受けつぐよ。」
と約束した。祖母はうれしそうに
　「ありがとう。じゃあ、ばあばは元気で長生きしとかんとね。」
と言ってくれた。
　ぼくが今できることは、米作りにもっと興味をもつことと、みんなにお米のおいしさを広めることだ。

～「ことばのいずみ」コンクールスピーチコンテスト【中学生の部】最優秀賞作品　～

ありがとう

「ありがとう。」これは、感謝の気持ちを伝える言葉です。

みなさんは、しっかり「ありがとう」を伝えられていますか。私は、誰かに優しさを向けられた時、ちゃんと「ありがとう」を伝えられるように意識しています。

例えば、何かを譲ってもらったり、困っている時に助けてもらったり、このような場面では、多くの人が「ありがとう」というでしょう。ですが、自分が不機嫌だったり、疲れていたりする場合、その無償の優しさに応えられないこともあります。余裕がないと冷静な判断ができなくなってしまいます。そして、その感情を言葉や態度に出し、相手の優しさにすら理不尽に怒り、相手を不快にさせることもあります。「ありがとう」は、自分の感情によってきちんと伝えられない時もあるのです。自分が相手を思って口にしたことでも、向こうからはどのように思われるか分かりません。だから、相手の気持ちを考え、喜んでもらえるような行動をとる努力をすべきだと思います。

私は、様々な国に行っても「ありがとう」という感謝の気持ちを伝えられるように、多くの国の「ありがとう」を覚えています。英語「Thank you.」フランス語「Merci.」スペイン語「Gracias.」中国語「謝謝」韓国語「カムサハムニダ」私が一番好きな「ありがとう」は、ドイツ語の「ダンケシェーン」です。これは普通の「ありがとう」とは少し違って丁寧な意味になります。日本の近い表現で例えると「感謝します。」となります。全ての国の「ありがとう」を覚えるのは難しいでしょうが、自分の好きな国、行ってみたい国の「ありがとう」だけでも覚えてみるのはどうでしょう。

現代では、「グローバル化」が進み、国境を越えての交流がますます身近なものになっています。たとえ異なる文化や言語だとしても、感謝する気持ちは普遍的なものであり、人と人との心を繋ぐ源だと思います。将来私が、外国で生活することになっても、私は感謝の気持ちを忘れず、それを表現することを大切にしたいです。

「ありがとう」は誰か一人の無償の優しさから始まり、それが連鎖していくのは世界共通だと思います。

「誰かのためにしたことは、いつか巡り巡って自分に戻ってくるんだよ。」

私の大好きな「鬼滅の刃」の主人公、竈門炭治郎のセリフです。確かに良い言葉ですが、私の考えは少し違います。自分に戻ってこなくても、どこかの誰かがほんの少しでも救われるなら、「ありがとう」も言われなくてもいいと思います。

「ありがとう」は重すぎることもなく、薄っぺらくもない絶妙な言葉です。この一言には豊かで温かい気持ちを生み出す不思議な力が宿っています。世界中にこの魔法の言葉を広めることで心と心が通じ合う素晴らしい世界が築けるのではないかと私は思います。

～「ことばのいずみ」コンクールスピーチコンテスト【高校生の部】最優秀賞作品　～

支えて支えられて

朝起きて、朝ご飯を食べ、学校に行く。学校に着いたら、授業で先生の話を聞き、休み時間では友達との会話を楽しむ。帰ってきたら、お風呂に入って、夜ご飯を食べる。そして、勉強した後、ベッドに入って明日の朝を楽しみに寝る。私はこんな日常を送っています。みなさんにもそれぞれの生活があります。その中で、私たちは数えきれないほど支えられています。もちろん、人に支えられています。動物や植物にも支えられることもあると思います。私たちは、その支えに感謝しましょう。

感謝を伝えるには、相手の支えをめいっぱい受けることが大切だと思います。例えば、親がご飯を作ってくれたときは、満腹になるまで食べたり、先生がわからないところを教えて下さるときは、わかるまで教えてもらったりするなど、支えを十分に受けるべきだと思います。このように、支えをめいっぱい受けることで、支えた人もうれしくなり、そのうれしさに支えられます。

しかし、支えをめいっぱい受けるだけで、相手のことも十分に支えられるわけではないと思います。私たちも相手を支えることが大切です。支えることが難しいと考える人もいると思います。しかし、派手なことをする必要はまったくありません。小さなことでも良いと思います。私は、小学生のとき、いろいろなことがうまくいかずに悩んでいました。そこで、親に相談して話を聞いてもらっているうちに、気持ちが楽になりました。悩みは解決していないのに、話を聞いてもらうという小さなことで、支えられた感じがしました。小さなことでも相手にとっては大きな支えになることもあるのです。最近、いじめや不登校という言葉をよく耳にします。これは支え合いとは真逆のことだと思います。いじめはいけませんが、もしいじめられている人がいたら声をかけるだけでも支えになると思います。自分ができる小さなことを積み重ねていくことで、自分では気づいていなくても、他の人を支えられるかもしれません。

最近、支えられていることを当たり前と思っている人が多い気がします。私もその一人かもしれません。めいっぱい支えを受ける以外にも相手に感謝を伝える方法があります。それは、「ありがとう」を言うことです。このたった五文字で相手に感謝を伝えられます。しかし、私自身もこの言葉を言わないことがあります。たった五文字で感謝を伝えることができる素晴らしい言葉です。小さなことでも「ありがとう」を言うべきだと思います。ご飯を作ってくれて「ありがとう」、消しゴムをひろってくれて「ありがとう」、話を聞いてくれて「ありがとう」、これだけで感謝が伝わると思います。「ありがとう」と言うことで相手もうれしくなり、支えられると思います。

以前、「ありがとう」の対義語を聞いたことがありました。それは、「当たり前」です。初めてそれを聞いたときはピンときませんでした。しかし、今ではとても納得できます。私は、支えられることを「当たり前」と思うのではなく、「ありがとう」と思う人になりたいです。支えられていることを「ありがとう」と思える人が増えれば、世界はより良くなっていくと思います。感謝を伝えるときはプレゼントを渡すのもいいけど、「ありがとう」を日頃から言う方がよっぽど感謝を伝えられると思います。「ありがとう」という素晴らしい五文字の言葉を積極的に使いましょう。

支えをめいっぱい受ける、「ありがとう」という言葉を言う、この二つだけで、支えに感謝することができ、その感謝が相手の支えにもなります。また、自分も小さなことでもいいから行動することで、どこかで支えになっているかもしれません。このように、支えあいながら、私たちは今日も生きています。

～「第2回　ハートフルメッセージコンテスト」 入賞作品より　～

本コンテストでは、言葉にして伝えることができなかった感謝の気持ちを手紙として応募いただきました。子どもに宛てた手紙、親に宛てた手紙、大切な方に宛てた手紙…どの作品も“ありがとう”の気持ちがあふれる素敵な手紙ばかりでした。大切な誰かに宛てた“ありがとう”の思いは、読む人も温かな気持ちにしてくれます。 今年度の応募作品から、入賞作品を紹介します。

次回は、あなたの感謝の気持ちを手紙にしてみませんか。

【 最優秀賞作品 】　**地域の「声かけおじさん、おばさん」へ**

先日二十歳の式典を迎え、久しぶりに母校の小学校を訪れました。校舎を懐かしい思いで歩いていると、玄関に置いてあった登下校用の旗に目が留まりました。

思い返せば、六年間毎日安心して小学校に通うことができたことは、「声かけおじさん、おばさん」と呼ばれていた地域の方々なしには語ることができません。登下校時の旗振りや引率、子供会活動などを通して、私たちを見守り、育ててくださいました。

二十歳になった今だからこそ、このような見守り活動が、決して当たり前ではなく、多くの方々の温かい想いに支えられていたということを実感するとともに、このような愛情あふれる地域で育つことができたことを、非常に誇らしく、嬉しく思います。お世話になった方々に直接お礼をすることは難しいかもしれませんが、「恩送り」という形で、私も地域に貢献していきたいです。これからも、どうぞお元気でお過ごしください。

【 最優秀賞作品 】　突然、逝ってしまったあなたへ

梅雨が明けた7月2日自治会周辺を見廻り、その足で稲の植え付けに出かけたあなた、2日後熱中症と診断され帰らぬ人となりました。無口な性格でありながら 13 年もの長い間、自治会長として頑張っていました。コピー機には配布されるはずであろう印刷物が残されていた。こんなはずではなかったとさぞ『無念』だったでしょう。私はなすすべもなく、毎日泣いていた。そんな時『ありがとう』メッセージが目に止まり直ぐに筆をとった。この 3 年間も私の母の介護であなたは独りぼっち。「早よ帰れ母ちゃんが待ちよいやんど」と。亡くなる前日、私と孫の声かけに薄れ行く意識を奮い立たせるかのように両手で握り返してくれた。きっと「ごめん、孫達を頼む」と伝えたと思う。46 年間の結婚生活では感謝の気持ちは伝えられず当たり前のように思っていた。今、伝えたい。「私を長い間支えてくれて『ありがとう』天国から見守っていてね」と。きっときっと伝わるよね。『ありがとう』『ありがとう』の言葉が。

【 最優秀賞作品 】　ギフト

娘が病気になったのは突然の出来事だった。当時、私は地方勤務のため、家族と離れ離れの生活を送っていた。家族とは定期的に連絡を取っていたが、表情を知る術がなかった。乳幼児、小学生と比較的に健康に育った娘だったが、まさか中学生、高校生で二度も発症するとは思いもよらなかった。病院では、採血や点滴、鎮痛剤など一通りの対症療法を施したが、一向に回復が見込まれなかった。しかも、感染症が蔓延する中、家族は面会謝絶を余儀なくされた。私が唯一できたことは、約 40mは離れていたであろう道路を挟んだ斜向かいの病室の窓ガラスから双方で大きく手振りをしたことのみ。窓ガラスにおぼろ気に映る娘、どんな表情、気持ちでいたのかも分からず、もどかしさと寂寥感が同時に込み上げてきた。長らく病室に隔離され、登校したくてもできない生活だった。そんな娘もこの春、高校卒業を迎える。無理をしないでね。口下手な父だからこそ、今思いを伝えたい。

思いやりあふれるまちに

モラリティ・インプルーブメント推進事業
令和7年3月発行
姶良市教育委員会学校教育課